

一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのほんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帶のようなどころを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないのに、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすっとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまつ赤になってしましました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やつぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知つていて、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしょに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な貢いいっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかつたのに、すぐに返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになつたので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、そう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするの

でした。

先生はまた云いました。

「ですからもしこの天の川がほんとうに川だと考へるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこ砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのでです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えしたがつて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私ども

の太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私たちの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒即ち星しか見えないのでしよう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋を開けたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立つて礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところに集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す鳥瓜を取りに行く相談らしかつたのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振つてどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上りますと、突き当たりの大きな扉を開きました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばつたりラムプシエ

ードをかけたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行つておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾つて行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセツトであるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼拭いながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしまらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいっぱいに入れた

平たい箱をもういちど手にもつた紙きれと引き合せてから、さつきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙つてそれを受け取つて微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉を開けてさつきの計算台のところに来ました。するときの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞄をもつておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢よく帰つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いが下りたままになつていきました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上つて行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買つてきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ころ帰つたよ。みんなそこらをしててくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかつたろうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといつしょにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だつて今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしね。」

「きっと出でているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数文字分空白〕

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だつたそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコールラムプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなつてそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになつていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、罐がすつかり煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで鳥瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きつと犬もついて

行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行つておいで。川へははいらぬいでね。」

「ああぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒になら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジヨバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて「では一時間半で帰つてくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならん
だ町の坂を下りて來たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光つて立つていました。ジョバンニ
が、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののように、長くぼん
やり、うしろへ引いていたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりな
つて、足をあげたり手を振つたり、ジョバンニの横の方へまわつて來るのでした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越
す。そしたら、こんどはぼくの影法師はコムバスだ。あんなにくるつとまわつて、前
の方へ來た。)

とジョバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひ

四、ケンタウル祭の夜

るまのザネリが、新らしいえりの尖ったシャツを着て電燈の向う側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云つてしまわないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植つた家の中へはいってきました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、

すっかりきれいに飾られた街を通つて行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるつくるつとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載つて星のようゆつくり循つたり、また向う側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかつたのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま橢円形のなかにめぐつてあらわれるようになつて居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたような帶になつてその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立つていましたらしいしばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇

四、ケンタウル祭の夜

や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかるつていました。ほんとうにこんなような蝎だの勇士だのそらにぎっしり居るだろか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくほんやり立つて居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきゅうくな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張つて大きく手を振つて町を通つて行きました。

空気は澄みきつて、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走つたり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいた。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがつたことを考えながら、牛乳

屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立つて、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしいんとして誰も居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたつてから、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」ジョバンニが一生けん命勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のどこを擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。「おつかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したってから来てください。」その人はもう行つてしまいそうでした。
「そうですか。ではありがとうございます。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。
十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の
前で、黒い影やほんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹い
たり笑つたりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやつて来るのを見ました。その笑
い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだ
ったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、
一そつとう勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまつたように思つたと
き、

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」さつきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョ
バンニはまつ赤になつて、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとし

ましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは氣の毒そうに、だまって少しおらつて、怒らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、遁げるよう^にその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でぴょんぴょん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

五、天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ほんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼつて行きました。まづくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた鳥瓜のあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松や樺の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそとか野ざくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫

りだしたというように咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。
ジョバンニは、頂の天氣輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて來る所以でした。風が遠くで鳴り、丘の草もしづかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。

ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがつた野原を見わたしました。
そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらつたり、いろいろな風にしていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帶がみんな星だというぞ。

ところがいくら見えていても、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした

五、天氣輪の柱

冷いところとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引っ込んだりして、とうとう蕈のようによく延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやつぱりほんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六、銀河ステーション

そしてジョバンニはすぐうしろの天氣輪の柱がいつかほんやりした三角標の形になつて、しばらく螢のように、ペカペカ消えたりともつたりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い銅青のそらの野原にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立つたのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声がしたと思うといきなり眼の前が、ぱつと明るくなつて、まるで億万の螢鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイアモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと獲れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあつと

明るくなつて、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦つてしましました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗つている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青い天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、向うの鼠いろのワニスを塗つた壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光つてゐるのでした。

すぐ前の席に、ぬれたようになつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思つたとき、

カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走つたけれども遅れてしまつたよ。ザネリもね、ずいぶん走つたけれども追いつかなかつた。」と云いました。

ジョバンニは、(そうだ、ほくたちはいま、いつしょにさそつて出掛けたのだ。)とおもいながら、

「どこかで待つていようか」と云いました。するとカムパネルラは
「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しい
というふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあ
るというような、おかしな気持ちがしてだまつてしましました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直つて、
勢よく云いました。

「ああしまつた。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッヂ帳も忘れてきた。けれど構わ

六、銀河ステーション

ない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。

川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきっと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになつた地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まつたくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿つて一条の鉄道線路が、南へ南へとたどつて行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまつ黒な盤の上に、一一の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできるねえ。」

ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらつたんだ。君もらわなかつたの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるではね上りたいくらい愉快になつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんどん流れを行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しか

すんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぽい光つていてるのでした。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に來た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走つて行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになつたみじかい芝草の中に、月長石ででも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとつて、また飛び乗つてみせようか。」ジョバンニは胸を躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行つてしまつたから。」

カムパネルラが、そう云つてしまふかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぽいに光つて過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんのかいろな底をもつたりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光つて立つたのです。

七、北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切つたというように、少しどもりながら、急きこんで云いました。

ジョバンニは、

(ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしゃって、いまぼくのことを考えているんだつた。)と思ひながら、ほんやりしてだまつていきました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いつたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじやないの。」ジョバンニはびつくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなかが、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう凍つた北極の雪で鑄たといつたらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しづかに永久に立っているのでした。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえつて見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐにつきもののひだを垂れ、黒いバイブル

を胸にあてたり、水晶の数珠をかけたり、どの人もつましく指を組み合せて、そつちに祈つてゐるのでした。思わず二人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにうつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やつぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたように見え、また、たくさんのはりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつてしまい、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとうすつかり見えなくなつてしましました。ジョバンニのうしろには、いつから乗つっていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとま

つすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わつて来るのを、虔んで聞いているというように見えました。旅人たちはしづかに席に戻り、二人も胸いっぽいのかなしみに似た新らしい気持ちを、何気なくちがつた語で、そつと談し合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ほんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいほんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラットホームの一列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなつてしまい

ました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジョバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかつた電燈が、一つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかつたのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通つていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出

るのでした。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云つてゐるのでした。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習つたろうと思ひながら、ジョバンニもほんやり答えていました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしやの皺曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジョバンニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいそとの銀河の水は、水素よりもつとすきとおつてゐたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたとこが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいに生えている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出でているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立つたり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光つたりしました。

「行つてみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りました。その白い岩になつた処の入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまつて、岩から黒い細長いさきの尖つたくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて來たんじやない。岩の中に入つてゐんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんではない。」「早くあすこへ行つて見よう。きっと何か掘つてるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近よつて行きました。左手の渚には、波がやさしい稻妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコープをつかつたりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そこのその突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おつと、もし遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になつて、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて

見ると、そこには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こっちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あつたろう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとこのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているとこに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけもののかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやつてくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ほくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ほくらとちがつた

やつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そもそもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じやないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジョバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしそうに、あちこち歩きまわつて監督をはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないよう走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくなりませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジョバンニは思いました

た。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなつて、間もなく二人は、もとの車室の席に座つて、いま行つて来た方を、窓から見ていました。

八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しほろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすほめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆつくり網棚にのせました。ジョバンニは、

なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまつて正面の時計を見ていましたら、ずうつと前の方で、硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、しづかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲虫がとまつてその影が大きく天井にうつっていました。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネルラのようすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなつて、すすきと川とかわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖つ

八、鳥を捕る人

た帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらつとこっちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったでもなく、頬をぴくぴくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて來る所以でした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジヨバンニは、どつちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝つて、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待つていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくつかないうちに、ぴたつと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じやありません。みんなたべるじやありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立つて、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまどつて來たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」二人は思わず叫びました。まつ白な、あのさつきの北の十字架のよう光る鷺のからだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

「眼をつぶつてるね。」カム・パ・ネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑つた眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしよう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐で紐でくくりました。誰がいつたいここらで鷺なんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになつて、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょうどさつきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べつたくなつて、

ならんでいました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チヨコレートででもできているように、すっときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわためました。ジョバンニは、ちょっと喰べてみて、（なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チヨコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もつとたべたかったのですけれども、

「ええ、ありがとうございます。」と云つて遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、

鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものを貰つちやすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間 させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじやなくて、渡り鳥どもが、まつ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持つて來たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、斯う云つてやりましたがね、はつは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。
「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向ひ直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけあ、砂に三四日うずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じやない。ただのお菓子でしきょう。」やつぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切ったというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立つて荷物をとつたと思うと、もう見えなくなつていきました。

「どこへ行つたんだろう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていた

のです。

「あすこへ行つて。ずいぶん奇体だねえ。きっとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおりるといいな。」と云つた途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり六十度に開いて立つて、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片つ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くペカペカ光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなほんやり白くなつて、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多いのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まつて扁べつたくなつて、間もなく熔鉱炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂について

いるのでしたが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたつて、死ぬときのような形をしました。と思ったら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却つて、

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのでした。

「どうしてあすこから、いつぺんにここへ來たんですか。」ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。「どうしてつて、来ようとしたから來たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

八、鳥を捕る人

ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまつ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかつたというように雑作なくうなづきました。

九、ジヨバンニの切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのようだ、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立つて、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおつた球が、輪になつてしまつてしづかにくるくるとまわつていました。黄いろのがだんだん向うへまわつて行つて、青い小さいのがこつちへ進んでき、間もなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまだだんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰り返し、とうとうすっと

はなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、また丁度さつきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡つているように、しづかによこたわつたのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……」鳥捕りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶつたせいの高い車掌が、いつかまつすぐに立つていて云いました。鳥捕りは、だまつてかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちょっと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方は？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。「さあ、」ジョバンニは困つて、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入つていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入つていたろうかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらい

の大きさの縁いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やつちまえと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて町寧にそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。
「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります。」
車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だつたか待ち兼ねたというように急いでのぞきこみました。ジョバンニも全く早く見たかつたのです。ところがそれはいちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまつて見て

九、ジョバンニの切符

いると何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのでした。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したものでぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまでも行ける筈でさあ、あなた方大したものですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなつて答えながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したものだというようにならちらこつちを見ているのがほんやりわりました。

「もうじき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとなりの鳥捕りが氣の毒でたま

らなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたように横目で見てあわててほめたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つづけて立つて鳥をとつてやつてもいいというような気がして、どうしてももう黙つていられなくなりました。ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返つて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかつたのです。また窓の外で足をふんばつてそらを見上げて鷺を捕る支度をしているのかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖つた帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたろう。」カムパネルラもぼんやりそう云つていました。

「どこへ行つたろう。一体どこでまたあうのだろう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかつたろう。」

「ああ、僕もそう思つてゐるよ。」

「僕はあの人気が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思いました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考えたためだらうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやつぱりそれは窓からでも入つて来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびつくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだして

立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしつかりひいて立つていました。

「あら、ここどこでしよう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがつて不思議そうに窓の外を見ていた。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子は

すなおにそこへ座つて、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおおねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座つたばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待つていらつしやつたでしよう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたつてているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわとこのやぶをまわつてあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待つて心配していらっしゃるんですから、早く行つておつかさんにお目にかかりましようね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなかよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあ

の夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター をうたつてやすむとき、いつも窓からほんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいとこを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きっとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたつて行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。どうなすったのですか。」さつ

きの燈台看守がやつと少しづかたように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになつたのであとから発つたのです。私は大学へはいつていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かつたのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになつていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかつたのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務

だと思いましたから前にいる子供らを押しのけようとした。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりでしょってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやつてお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまっすぐに立つているなどとてももう腸もちざれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまつて船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれども滑つてずうつと向うへ行つてしましました。私は一生けん命で甲板の格子になつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく　番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれもうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入つた

と思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうとしたと思つたらもうここへ來ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。ええボートはきっと助かつたにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですればやく船からはなれていきましたから。」

そこらから小さいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラも今まで忘れていたいろいろのことをほんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかつたろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいつたいどうしたらしいのだろう。）ジョバンニは首を垂れて、すつかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただ

しいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしづつですから。」

燈台守がなぐさめでいました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐつたり席によりかかつて睡つていました。さつきのあのはだしだつた足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

「ことごとごとごと」汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまざまの三角標、その大きなものの上には赤い点点をうつた測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集つてぼおつと青白い霧のよう、そこからかまたはもつと向うからかときどきさまざまな形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわ

九、ジョバンニの切符

るきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめっていました。「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとつてジョバンニたちの方をちょっと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたのですこししゃくにさわってだまつていきましたがカムパネルラは

「ありがとうございました。すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送つて
よこしましたのでジョバンニも立つてありがとうございました。

燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で一つずつ睡つている姉弟の膝
にそつと置きました。

「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでにいいものができ
るような約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいて
い自分の望む種子さえ播けばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック
辺のように殻もないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいら
っしゃる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもあり
ませんからみんなそのひとによつてちがつたわずかのいいかおりになつて
毛あながらちらけてしまうのです。」

にわかに男の子がぱつちり眼をあいて云いました。

「ああぼくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね立派な戸棚や本のあるとこに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらつたよ。ぼくおっかさん。りんごをひろつてきてあげましようか云つたら眼がさめちゃつた。ああこことつきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果がそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらつたよ。おきてごらん。」

姉はわらつて眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるようにもうそれを喰べていました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になつて床へ落ちるまでの間にはすうつと、灰いろに光つて蒸発してしまったのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしました。

川下の向う岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまつ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまつてその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまつ白な蝶のような露が太陽の面を擦めて行くように思われました。

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとなりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。
「からでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。
まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列に

なつてとまつてじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのとこに毛がびんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた一番の讃美歌のふしが聞えてきました。よほど的人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座りました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラも一緒にうたい出したのです。

そして青い橄欖の森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまいそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗らされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀が居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジヨバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのよう
に見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじ
たりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかおる子に云いました。
「ええ、三十疋ぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀
よ。」女の子が答えました。ジヨバンニは俄かに何とも云えずかなしい気がして思
わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おう
としたくらいでした。

川は二つにわかされました。そのまづくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組
まれてその上に一人の寬い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。そし

九、ジョバンニの切符

て両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのでした。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていましたが俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りました。すると空中にざあっと雨のような音がして何かまつくらいものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どう、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のようにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃあんという潰れたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗

をふって叫んでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかがやかせながらそらを仰きました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジヨバンニにはなしかけましたけれどもジヨバンニは生意氣ないやだいと思いながらだまつて口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてだまつて席へ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引っ込んで地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えるんでしょうか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしよう。」

カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引っ込んだかつたのですけれども明るいとこへ顔を出しがつらかつたのでだまつてこらえてそのまま立つて口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもつとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずっと向うにまるでけむりの小さな小さな青い火が見える。あれはほんとうにしづかでつめたい。僕はあれをよく見てころもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱つて痛いあたまを両手で押えるようにしてそっちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談じているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行つたようにほんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがつてだんだん高くなつて行くの

でした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込んで向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのでした。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからただぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしづかになつていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車も

うごかずしづかなしづかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまつたくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れ来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしづかないいとこで僕はどうしてもつと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といつしょに汽車に乗つていながらまるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子のような笛が鳴つて汽車はしづかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。
「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりら

しい人のいま眼がさめたという風ではきはき談している声がしました。

「どうもろこしだつて棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありましようかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になつているんです。」

そろそろここはコロラドの高原じゃなかつたろうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ていたのでした。突然とうもろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいっぱいにひらけました。新世界交響樂はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまつ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追つて來るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。
「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追いかけているんでしよう。」

「いいえ、汽車を追つてるんじゃないんですよ。獵をするか踊るかしてゐんです
よ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら
云いました。

まったくインデアンは半分は踊つているようでした。第一かけるにしても足のふ
みようがもつと経済もそれ本氣にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽
根は前の方へ倒れるようになりインデアンはぴたつと立ちどまつてすばやく弓を空
にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインデア
ンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立つてわら
いました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影ももうどんどん小さく遠くな
り電しんばしらの碍子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたとうもろこし

の林になつてしましました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走つていてその谷の底には川がやつぱり幅ひろく明るく流れていたのです。「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じやありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょ。」さつきの老人らしい声が云いました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなつて來ました。汽車が小さな小屋の前を通つてその前にしょんぼりひとりの子供が立つてこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんどんどんどん汽車は走つて行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしつかりしがみついていました。ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手を今までよ

九、ジョバンニの切符

ほど激しく流れで来たらしくときどきちらちら光ってながれていました。うすあかい河原なでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようによつくりと走っていました。

向うとこっちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたつていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジョバンニがやつとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんでしようか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらつと光つて柱のようによくはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりしました。

その柱のようになつた水は見えなくなり大きな鮭や鱈がきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたいくらい気持が軽くなつて云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱈やなんかがまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱈なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかつたねえ。」ジョバンニはもうすっかり機嫌が直つて面白そうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。

九、ジョバンニの切符

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立つていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」

う。」

「ぼくも知つてらい。双子のお星さまが野原へ遊びにててからすと喧嘩したんだろ

う。」「そうじやないわよ。あのね、天の川の岸にね、おつかさんお話をすつたわ、

……」

「それから彗星がギーギーフーギーギーフーで云つて來たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじやないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだろうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしゃつたのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまつ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まつたく向う岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしく酔つたようになつてその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジョバンニが云いました。

「蝎の火だな。」カムパネルラが又地図と首つ引きして答えました。

「あら、蝎の火のことならあたし知つてるわ。」

「蝎の火つてなんだい。」ジョバンニがききました。

「蝎がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

「蝎って、虫だろう。」

「ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝎いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで蟻されると死ぬって先生が云つたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一匹きの蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですつて。するとある日いたちに見附かつて食べられそうになつたんですつて。さそりは一生けん命遁げて遁げたけどとういういたちに押さえられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたというの、

ああ、わたしは今までいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私

がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉れてやらなかつたろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。つて云つたというの。そしたらいつか蝎はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰つたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。」

ジヨバンニはまつたくその大きな火の向うに三つの三角標がちょうどさそりの腕のようにこつちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざまの楽の音や草花の匂のようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのでした。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなり今まで睡つていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマストリイのようにまつ青な唐檜かもみの木がたつてその中にはたくさんのかさん豆電燈がまるで千の螢でも集つたようについていました。「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿一枚?なし」

「ボール投げなら僕決してはずさない。」

男子の子が大威張りで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗つてゐるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとなりの女の子はそわそわ立つて支度をはじめましたけれどもやつぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようでした。

「ここでおりなけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭だい。僕もう少し汽車へ乗つてから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一緒に乗つて行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符持つてゐるんだ。」「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくたつていいぢやないか。ほくたちここで天上よりももつと

いいとこをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行つてらつしやるしそれに神さまが仰つしやるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじやないよ。」

「あなたの神さまつてどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたつた一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたつた一人です。」

「ああ、そんなんでなしにたつたひとりのほんとうのほんとうの神さまです。」

「だからそうじやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。女の子もちよどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜し

そうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずっと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木という風に川の中から立つてかがやきその上には青じろい雲がまるい環になつて後光のようにかかつてゐるのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまつすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞つてゐるのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおつた何とも云えずさわやかなラッパの声を

ききました。そしてたくさんのシゲナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行つてすっかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じやさよなら。」女の子がふりかえつて二人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒ったようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こっちをふりかえつてそれからあとはもうだまつて出て行つてしましました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄かにがらんとしてさびしくなり風がいっぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたつてひとりの神々しい白いきもののが手をのばしてこっちへ来るのを一人は見ました。けれど

もそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもつた電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一列についた通りがありました。それはしばらく線路に沿つて進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通つて行くときはその小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにぽかっと消え一人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえつて見るとさつきの十字架はすっかり小さくなつてしまいほんとうにもうそのまま胸にも吊されそうになり、さつきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかほんやりして見分けられませんでした。

ジヨバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになつたねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ペん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがほんやり云いました。

「僕たちしつかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新らしい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそつちを避けるようにながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまづくらな孔がどほんとあいつているのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云いまし

た。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてゐねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどそこはほんやり白くけむつてゐるばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてほんやりそつちを見ていました向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえつて見ましたらその今までカムパネルラの座つていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっていました。ジョバンニはまるで鉄砲丸

九、ジョバンニの切符

のよう立たちあがりました。そして誰にも聞えないよう窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうつて叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまつくりになつたように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむつていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていきました。

ジョバンニはばねのようにはねきました。町はすっかりさつきの通りに下でたくさんの灯を綴つてはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたつたいま夢であるいた天の川もやつぱりさつきの通りに白くほんやりかかりまつ黒な南の地平線の上では殊にけむつたようになつてその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変つてもいよいよでした。

ジョバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待つているお母さんのが胸いっぱいに思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中

を通つてそれからほの白い牧場の柵をまわつてさつきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰つたらしくさつきなかつた一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジョバンニは叫びました。

「はい。」白い太いズボンをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて一本の牛乳瓶をもつて来てジョバンニに渡しながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうつかりしてこうしの棚をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしまいましたね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつてその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行つた川へかかつた大きな橋のやぐらが夜のそらにほんやり立つていました。ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいずつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいっぱいでした。

ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一齊にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿つてたくさんのかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう鳥瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしづかに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ州のようになつて出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立つていました。ジョバンニはどんどんそつちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといつしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から鳥うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落つこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまつた。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてつた。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖つたあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまつすぐに立つて右手に持つた時計をじつと見つめていたのです。

みんなもじつと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンラン

普がたくさんせわしく行つたり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えたのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨きく写つてまるで水のないそのままのそらのよう見えました。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかつたのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立つていて誰かの来るのを待つているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよつて博士の前に立つて、ぼくはカムパネルラの行つた

九、ジョバンニの切符

方を知っていますぼくはカムパネルラといつしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまつて何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶に来たとでも思つたものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとうございました」と町ねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままた起きました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら銀河のいっぱいにうつった方へじっと眼を送りました。
ジヨバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前を
はなれて早くお母さんに牛乳を持つて行つてお父さんの帰ることを知らせようと思
うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

九、ジョバンニの切符